



TITLE:

商人と一次産品の価格決定

AUTHOR(S):

服部, 茂幸

CITATION:

服部, 茂幸. 商人と一次産品の価格決定. 経済論叢 1992, 150(5-6): 71-87

ISSUE DATE:

1992-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/44866>

RIGHT:

經濟論叢

第150巻 第5・6号

スコットランド啓蒙における商業と軍事……………	田 中 秀 夫	1
サバ、サラワクの木材産業の持続的発展の 見通しについて……………	中 島 健 二	25
ローカル・ミニマム論の検討（2）……………	李 昌 均	49
商人と一次産品の価格決定……………	服 部 茂 幸	71
アジア NIEs 工業化過程の 政治経済学研究（1）……………	宋 立 水	88
書 評		
中村達也『豊かさの孤独』 （岩波書店、1992年）……………	根 井 雅 弘	115

学 会 記 事

經濟論叢 第149巻・第150巻 総目録

平成4年11・12月

京 都 大 学 經 済 學 會

商人と一次製品の価格決定

服 部 茂 幸

は じ め に

カレッキは、短期（short term）の生産調整が価格によって行われる産業と数量によって行われる産業があり、原材料・食料品と完成財で価格形成原理が異なることを指摘した¹⁾。それ以後、このような価格論2分法は、ヒックス²⁾、カルドア³⁾らによって採用されている。一次製品の市場では、価格決定権は商人が保持している。それに対して、工業部門では、生産者が費用に基づいて価格を決めるのである。

けれども、19世紀の資本主義の経済では、主として、価格は需給によって決定されていたのに対し、20世紀の現代資本主義では、需給調整メカニズムは作用せず、価格は費用に基づいて決定されている。そして、自由競争⁴⁾から寡占

1) M. Kalecki, *Theory of Economic Dynamics*, Allen and Unwin, London, 1954, p. 11. 宮崎義一・伊東光晴訳『経済変動の理論』新評論，1958年，3ページ。

2) J. Hicks, *The Crisis in Keynesian Economics*, Basil Blackwell, Oxford, 1974, p. 23. 早坂忠訳『ケインズ経済学の危機』ダイヤモンド社，1977年，33ページ。

3) N. Kaldor, "Inflation and Recession in the World Economy", in N. Kaldor, *Further Essays on Economic Theory*, Duckworth, London, 1978, p. 217. 「世界経済におけるインフレーションと景気後退」笹原昭五・高木邦彦訳『経済成長と分配理論——理論経済学統論』日本経済評論社，1989年所収，298-9ページ。

4) ここで使われている自由競争（あるいは単なる競争とも書くこともある）という概念は、単に賃金率、利潤率がどの部門でも等しくなるように労働と資本が移動できるということを示すだけである。そのため、1産業内での費用削減あるいは製品差別化によって発生する不完全競争の存在や、独占の存在を否定するものではない。J. A. Kregel, *The Reconstruction of Political Economy: An Introduction to Post-Keynesian Economics*, 2nd ed., Macmillan, London, 1975, p. 42-3. 川口弘監訳，緒方俊雄・福田川洋二訳『政治経済学の再構築——ポスト・ケインズ派経済学入門』日本経済評論社，1978年，75-7ページ。

的競争へと経済システムが発展してきたということがその原因であるということを示すことがヒックス、カルドアの主たる目的であった。つまり、彼らによれば、現代資本主義で典型的な市場は寡占的な工業製品の市場である。そのために、ポスト＝ケインジアン⁵⁾の価格理論は、寡占市場の価格理論である「マーク・アップ理論」を中心として発展してきたのである。

けれども、一次製品の市場では、現在でも需要と供給によって価格が決定されている。しかしながら、未来の予想に対する確実性は存在しないし、再契約も認められていない。商人は不確実性の存在する世界で自己の行動を決めているのである。また、需給の一致によって成立する価格は、均衡価格であるとは限らないのであり、売買をうまくやることによって利益を得ることができる。そのため、需要の中には、投機的な部分も含まれている。むしろ、この投機的な活動の中に商人の積極的な意味を見い出しているのが、ヒックス、カルドアの考える商人経済論であろう。以上のことから、商人経済論は、一般均衡論に対する批判として、重要な意味を持っていることが分かるであろう。

そこで、この論文では、ヒックス、カルドアの商人経済論に基づき、一次製品の価格決定メカニズムを検討する。以下で述べるように、商人の投機的な行動は短期の価格には影響するものの、長期では生産費の水準が重要であることが分かるであろう。

したがって、一次製品の価格安定のためには貨幣賃金の安定が必要である。ところが、工業部門の寡占化は絶えざる貨幣賃金の上昇の圧力を生じさせている。そこで、この賃金上昇圧力が一次製品の価格に対しどのような影響を与えているかも検討する。

I 投機と商人

従来のポスト＝ケインジアン⁵⁾の価格理論は、寡占理論に基づいた「マーク・アップ」理論を基礎にして発展してきた⁶⁾。このことについて、以下の2つの

5) 例えば、アイクナー編『ポスト＝ケインジアン経済学入門』所収のケニヨンの論文「価格設

理由を挙げることができよう。第1に、現在の市場は寡占市場が中心であり、現代資本主義が大企業体制であるとポスト＝ケインジアンは考えていることである。第2は、費用に基づく価格が単純な形での需要と供給による均衡理論を否定するものであるから、新古典派の価格理論の批判として重要な意味を持っていたことである。

それに対し、主として一次生産品を中心とする競争的な市場の場合には、需給調節による価格決定メカニズムが考えられている。しかし、ヒックス、カルドアの考える伸縮価格市場は、一般均衡理論で考えられている市場と同一のものなのであろうか。

一般均衡論では競売人が価格設定の役割を果たすと考えられているのに対し、ヒックス、カルドアは商人が価格設定を行うと考えている⁶⁾。両者の差は単なる名称の差にとどまらない。

競売人は、財の生産者と消費者を結び付ける役割を果たしている。この点では、商人も同様である。すなわち、市場を組織するという点では、商人は競売人と同じである。けれども、競売人は自己取引を行うことが想定されず、外部の判断に基づく売り注文、買い注文を市場に伝える役割しか持っていない。それに対し、商人は、自己の判断で取引を行っている。むしろ、商人は、自己の判断で、価格の低い時に買い入れ、価格の高い時に売ることによって利益を得る。同時に、商人の行動には常に投機的な要素が存在するのである⁷⁾。

「定」では伸縮価格市場は扱われていない。P. Kenyon, "Pricing", in E. S. Eichner (ed.), *A Guide to Post-Keynesian Economics*, M. E. Sharpe, New York, 1979. 「価格設定」, 緒方俊雄他訳「ポスト＝ケインズ派経済学入門」日本経済評論社, 1980年所収。

6) 「この人物〔価格を設定する人物—引用者〕を、クラウアーは『競売人』と呼んでいるが、筆者はこの人物が『競売人』であるとは考えない。」J. R. Hicks, *Economic Perspectives: Further Essays on Money and Growth*, Oxford University Press, Oxford, 1977, ix, note 11. 貝塚啓明訳『経済学の思考法——貨幣と成長についての再論』岩波書店, 1985年, xxii ページ, 注11。そして、ヒックスはマーシャルを取り上げ、価格設定における商人の役割が重要であることを指摘している。Ibid., ix-x. 邦訳, x-xi ページ。

7) 「専門的な商人は価格に対する期待の影響の下で行動し、その限りでは、彼らの市場行動は本質的には投機的であるとも見なすことができる。」N. Kaldor, *Economics without Equilibrium*, Colledge Cardiff Press, Cardiff, 1985, p. 16-7.

また、一般均衡理論では、しばしば、均衡価格においてのみ取引が行われると考えられている。そのためには、全ての人が等しく完全な情報を持ち、未来に対しても確実に予想が可能である、あるいは、自己の見通しが間違っていることに気づいた時には再契約ができるというような条件が必要とされるであろう。けれども、いずれも、現実の市場では満たされそうにもない条件である。それに対して、ヒックス、カルドアの商人経済論ではこのような仮定は考えられていない。それどころか、先に挙げた条件が満たされるような場合、投機行動によって利益を得ることはできないから、確実性を持った世界では、商人の役割はかなりの程度まで限定されるものとなるであろう。

さらに、ヒックス、カルドアのいう組織化された市場は完全競争的な市場を意味しない。全ての人が商人として活動できるわけではないのである。市場の組織化には、取引費用を軽減する利点があると同時に、管理費用を負担しなければならないという不利益がある。このため、この管理費用を負担する意志と能力のある人間にしか、市場を組織することができないのである⁸⁾。

また、典型的な伸縮的価格市場と考えられている一次産品と債券の市場では、消費者の需要量と新しく生産された供給量というフローの世界での需給のバランスに基づいて価格は決定されるのではない。これらの市場では、過去に作られ蓄積された部分が相対的に大きい。それは、一次産品の市場の場合には、商品の生産に時間がかかるからであり、債券市場の場合には、基本的には中古市場の性格を持つからである。そのため、伸縮価格市場では、後述するように、価格は在庫保有量というストックに関連して決定されるのである⁹⁾。そして、

8) 「組織化された市場は、ルールの下で動いているという点では、ワルラス的な市場である。しかし、このルールはクラブのルールである。このような市場への加入は、ルールを守ることを約束し、(たとえばルールに関する争いを処理するための)管理費用を喜んで支払う人々にのみ限定される。……(中略)……ルールの下で取引するのが取引費用を軽くすることがわかってきたのでこれらの市場が形成される。取引費用が考慮されざるをえないことに注意を払う必要がある。」Hicks, *Economic Perspectives*, x. 邦訳, xi ページ。

9) 「われわれがケインズから学んだ最も重要なことの一つは、価格は、伸縮価格市場においては、商品に対する現行の需要と、現れつつある新規の供給とによって決定されるようにみえるけれども、実際には、取引業者の在庫を保持しようとする意欲によって決定されるのだ、ということノ

この在庫保有量は商人が決定するために、伸縮価格市場では、商人の行動によって価格の変動が生じるのである。以上のように、ヒックス、カルドアの展開した商人経済論は、一般均衡論に対する批判として積極的な意味を持つのである¹⁰⁾。

さて、全ての財に対し、完全な市場¹¹⁾が形成され、全ての商品が投機の対象となっているというわけではない。第1に、投機の対象となる商品は転売が予定されているので、売りたいと思った時にすぐに売れなければならない。したがって、投機対象とされる商品の市場は、完全市場あるいは準完全市場として組織化されていなければならないのである。これは、投機の対象となる商品は、1) 標準化されている、あるいは標準化できるような商品、2) 一般的な需要を持った商品でなければならないということを意味する。つまり、市場を組織するためには費用がかかるため、この費用が高い商品については、現物市場と先物市場が十分に組織化されない。そのため、このような商品は投機の対象とならないのである。

第2に、将来売ることを予定している商品は、実際に売るまでの間、商品を保管しておく必要がある。そのため、投機対象となる商品は、さらに、保管費用が低いという条件を満たしていなければならないのである。これは、商品が、3) 耐久性のある商品である、4) 分量に比例した価値を持つということを意味している。

このような条件を満たす商品は、一次産品と債券ということになる。このた

である。市場の均衡は、ストックの均衡なのであって、フローの均衡なのではない。」Hicks, *The Crisis in Keynesian Economics*, p. 24. 邦訳, 34-5ページ。「在庫が保持されないような伸縮価格市場は、きわめて例外的である——ただし、現実の世界では、であって、経済学の教科書はそうではない！」*Ibid.*, p. 25, note, 6. 邦訳, 36ページ, 注6。

10) ただし、ヒックスの場合、マーシャル的な経済調整の過程とワルラス的な経済調整の過程の質的な違いを一応は考慮するものの、結局のところ、両者は共に競争的な市場を説明する原理として補完的なものと考えられているために、商人経済論の持つ重要性が認識されていない。この点については、井上義明「『後期』ヒックス研究——市場理論と経験主義」日本評論社、1991年、32-37ページ参照。

11) ここでいう完全な市場とは、取引費用がかからないように、現物、先物の市場が整備されている市場のことであり、新古典派的な完全競争的な市場とは異なる。

めに、大規模な市場が形成されるのは、この2つの商品の市場に限られるのである。それに対し、例えば、中古の物的な生産設備の場合は、耐久性を持っているので保管費用は低いけれども、標準化が難しいので、市場の組織化は不完全となる。そのため、中古の生産設備に対しては、投機は発生しないのである¹²⁾。

II 予想と価格決定

商人にとっては、現在の価格だけでなく将来の価格も重要な意味を持っている。本節では、価格の変化に対し、商人が自己の所有する在庫量あるいは市場への供給量をどのように変化させるかを明らかにしよう。

将来価格が著しく下落することが予想される場合には、商人は多少低い価格でもできるだけ早く財を売ろうと考えるので、現在価格も低下するであろう。けれども、その場合でも、市場の情報が不完全でいつ顧客が買いに来るかが分からないために、顧客の需要に応じて行くためには、最低限の在庫は必要である。他方、価格の上昇が期待される場合には、商人は、ある程度、高い価格でないと売ろうとしないから、現在価格も上昇するであろう。この場合も、在庫保有には費用がかかるので、在庫は無量大にはならないのである。

以下では、商人の投機的な行動とそれが価格に及ぼす影響を考えよう。商人は、現在保持している商品を現在売るか、将来売るかを選択することができる。

12) 以上の投機に関する議論は、N. Kaldor, "Speculation and Economic Stability", in N. Kaldor, *Essays on Economic Stability and Growth*, Duckworth, London, 1960, pp. 20-3. に負っている。他方、デヴィッドソンは、カルドアの議論を受けて、よく組織化された現物市場と先物市場が存在するために、財が持つ必要のある条件として次の7つを挙げている。1) 一般的に受容される財であること、2) 標準化可能な財であること、3) 新・旧品の間の代替可能性が高いこと、4) 現存ストックが年々のフローと比較して大きいこと、5) 耐久的な財であること、6) 容量に比例して価値を持つこと、7) 不確実な世界では、必要な時に残りの買い手または売り手として行動する金融機関があることである。このうち、(4)、(5)は現物市場と先物市場の発達の必要条件であり、残りはこれらの市場が存在した時に、市場の組織化と完全性の程度を決める条件である。P. Davidson, *Money and the Real World*, 2nd ed., Macmillan, London, 1978. p. 87. 原正彦監訳、金子邦彦・渡辺良夫訳『貨幣的経済理論』日本経済評論社、1980年、97ページ。デヴィッドソンの条件は、おおむねカルドアの条件と同じであるが、(7)において、金融機関の役割を入れている。

今、現在と将来のいずれの時点で商品売るのが有利であるかという問題を考えよう。商人が現在保有しようとする在庫量を s_t とし、現在の売り渡し価格を p_s 、将来の売り渡し価格の予想値を p_f と置く。将来の価格については、不確実性があり、個々人の間にも予想の違いがあるが、ここでは、代表的な予想値を p_f とする。

商品の販売を将来に延ばすと、それまでの間、在庫を保有する必要がある。在庫保有には費用がかかるので、将来の売り渡し価格が現在の価格より高くても、商人にとって、現在販売した方が有利になる可能性が存在する。

商人は現在、商品売り、これを貨幣で貸し付けると利子を得ることができる。この利子以上の利益がない場合には、他の費用が存在しないとしても、商人は将来まで販売を引き延ばそうとはしないであろう。今、短期利子率 i は外生的に決まり、一定とする。すると、現在価格は p_s だから、商品 1 単位当たりの利子費用は ip_s となる。

また、保管のためには費用がかかる。時間が経過することによって質の低下による損失も発生するであろう。商品 1 単位当たりの在庫保有費用 c も商人は賄わなければならない。 c は、在庫量 s_t の増加関数であるから、

$$c=c(s_t) \quad c'>0 \quad (1)$$

となる。

さて、在庫を著しく減少させることにも問題はある。在庫が全くない場合には、顧客の需要に対し、即座に應えることができないであろう。そのため、販売を継続的に行うためには、最低限の在庫は必要なのである。さらに、商人が急にたくさん売ろうとするような場合には他の商人の顧客に売らないといけなないので、市場価格 p_s よりも低い価格で売らなければならなくなるであろう。このような理由のために、販売を延期し、在庫を保持することによる利益も存在するのである。商品 1 単位当たりの在庫保有による収益 q は s_t の減少関数であるから、

$$q = q(s_t) \quad q' < 0 \quad (2)$$

である。

最後に、将来価格は予想値であるから、不確実なものである。この不確実性によって発生する商品1単位当たりの流動性プレミアムを l と置く。これは、 s_t の増加関数である。そのため、

$$l = l(s_t) \quad l' > 0 \quad (3)$$

である。

したがって、均衡点では、

$$p_f - p_s = ip_s + c(s_t) - q(s_t) + l(s_t)^{13)} \quad (4)$$

という関係が成立する。(4)の左辺が右辺よりも大きい場合には、商人は在庫を大きくしようとし、小さい場合には、在庫を小さくしようとする。また、 p_s , p_f が一定の場合、利子率 i の上昇、在庫保有費用関数 c 、流動性プレミアム関数 l の上方へのシフト、収益関数 q の下方へのシフトという要因は、全て、同一の s_t に対する右辺の値を増大させる。そのため、これらの要因は、全て在庫水準を減少させる原因となる。

以上のように、商人が保有しようとする在庫量は現在価格と将来価格の関係、利子率、在庫コスト、在庫保有による収益、流動性プレミアムによって決められるのである。

ところで、現在価格が現在の水準から変動した場合には、将来価格の予想値もまた、変動する可能性がある。そのため、将来価格の予想の変化の様子によっては、現在価格が上昇したにもかかわらず、在庫量が増大する可能性が存在する。

13) ところで、商人は将来の時点で実際に売買契約を結ぶ代わりに、現時点の先物市場で売買契約を結ぶことができる。先物市場で売ることによって商人は将来価格に関する不確実性を軽減することができるのである。この先物市場での価格を p_f' とする。先物市場での契約は、将来の時点で必ず実行される場合には、先物価格には不確実性が存在しないので、

$$p_f - p_f' = l(s)$$

となる。流動性プレミアムが正である限り、先物市場での価格は将来価格の予想値よりも小さくなるであろう。

(4) を p_s で微分して変形すると、

$$\frac{dp_f}{dp_s} - 1 - i = (c' - q' + l') \frac{ds_t}{dp_s}$$

となる。したがって、

$$\frac{ds_t}{dp_s} = \frac{\frac{dp_f}{dp_s} - 1 - i}{c' - q' + l'} \quad (5)$$

である。ここで、 $c' - q' + l' > 0$ だから、 $\frac{dp_f}{dp_s} \leq 1 + i$ の時、 $\frac{ds_t}{dp_s} \leq 0$ となる。こ

のことから、現在価格が上昇するにともなって将来価格の予想値が著しく上昇する場合、商人は現在価格の増大にもかかわらず、在庫をたくさん保持しようとする事が分かるであろう。

今、長期の価格はその商品の正常価格によって決められ、固定的なものであるとしよう。その時、将来価格の予想値は現在価格の変動による影響を受けない。その場合、(5)は、

$$\frac{ds_t}{dp_s} = - \frac{1 + i}{c' - q' + l'} \quad (5')$$

となる。この場合は、現在価格が増大すると、商人が保持しようとする在庫量は減少する。そして、利子率が高い時、1単位の在庫の増大に対する在庫コスト、流動性プレミアムの増大が小さく、収益の減少が小さい時には、その過程がいつそう促進されるのである。

商人は、現在価格や将来価格に対する予想にしたがって、在庫量や供給量を決定する。そのため、この将来価格に対する予想が現在価格から強い影響を受ける場合には、現在価格の上昇にもかかわらず、供給量が減少する場合も考えられる。けれども、商人の将来価格の予想が正常価格によって決まっている場合には、予想が現在価格の変化の影響を被らなくなるために、現在価格の上昇が供給の増大をもたらすのである。

Ⅲ 短期と長期の供給曲線

本節では、商人以外の消費者、生産者の行動にも注目して、市場における一次製品の価格決定の問題を検討しよう。

一次製品の生産は、短期 (short term) には増減させることができないというのが、カレッキの主張である¹⁴⁾。したがって、一次製品の短期の価格はストックの価格として示されることになる。そのため、一次製品の短期的な価格は骨董品、美術品などの再生産不可能な財の価格と同様に、需要の変動に応じて大きく変動するという性質を持っている。けれども、一次製品は、骨董品、美術品とは違い再生産可能な財であり、長期 (long term) には生産は弾力的に行われる。したがって、一次製品の長期の価格は、フローの価格として表現されることになる。以上のような、短期と長期、ストックとフローの問題が一次製品の価格決定について重要な役割を演じるのである¹⁵⁾。

さて、現在、商人が市場で販売することのできる最大量 \bar{S} は、前期からの在庫の持ち越し+今期新しく生産されたものである。一次製品の短期の供給は固定的なので、 \bar{S} は価格に非弾力である。そのため、図1において、 \bar{S} は垂直な直線として示される。この \bar{S} は商人の過去の在庫保有に対する意想決意によっても影響を受けてはいるが、主として、生産者の過去の生産に対する決意によって決められる^{16) 17)}。

他方、 \bar{S} は商人の市場への供給量 S と在庫 s_t の和である。今、将来価格の

14) Kalecki, *op. cit.*, p. 11. 邦訳, 3-4ページ。

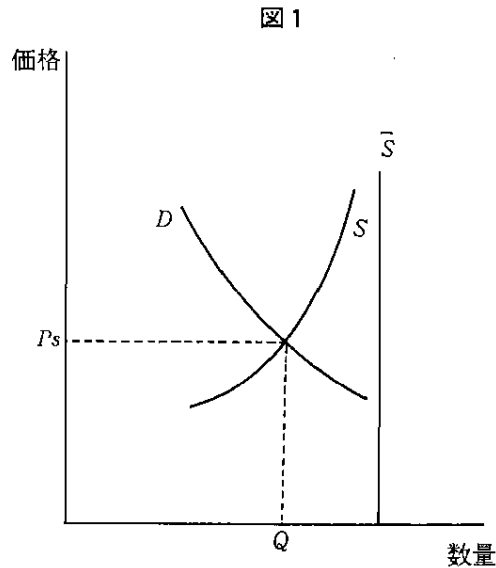
15) 現物市場が伸縮価格市場であり、先物市場が固定価格市場であるという指摘は、デヴィッドソンにも見られる。Davidson, *op. cit.*, p. 406-7. 邦訳, 453ページ。

16) 一次製品の価格が上昇した場合、商人は在庫ストックを減らそうとし、生産者は生産を増加させようとする。それにしたがって、 \bar{S} も変化する。この時、在庫の変化は即時的なものであるのに対し、生産の変化には時間がかかる。ここでは、1期間の長さは前者の影響が無視できるような長さに設定している。

17) もちろん、予想されていなかった天候の変化などの自然の状況によって、意図せざる生産量の変化が引き起こされることもあるけれども、これは、 \bar{S} を左にシフトさせるだけであり、短期的な一時製品の供給が価格に対し非弾力性であることには変わりがない。

予想が安定的であると仮定する。この場合は、前節から分かるように、現在価格が上がれば在庫が減少するので、現在価格が上昇は供給量の増大をもたらす。したがって、現在価格 p_s と供給量 S の関係は、図 1 において、右上がりの曲線として示すことができる。

それに対し、消費需要は曲線 D によって与えられる。この時、需要曲線 D と供給曲線 S の交点で、一次産品の価格 p_s と消費者への販売

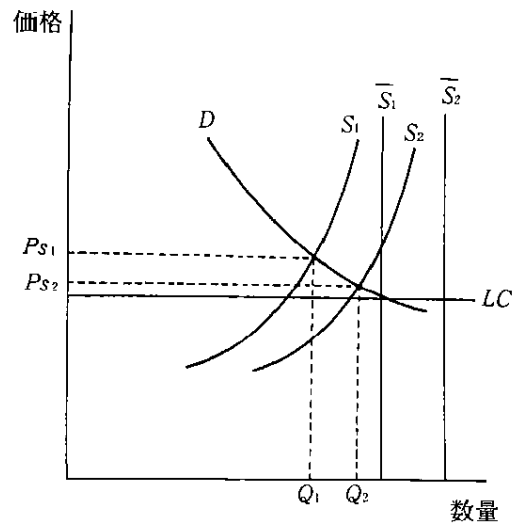


量 Q が決められる。なお、 S は右上がりの曲線であるから、商人の行動は価格をある程度は安定化させる効果を持つことが分かるであろう。そして、商人がわずかな価格差に反応して、自己の在庫を大きく変動させていくにしたがって、いっそうこの効果は大きくなるのである。

ところで、一次産品の供給曲線 S がこのような右上がりな曲線として表されるのは、将来価格の予想値が正常価格として決まっているために、現在価格の変動の影響を被らないことによるところが大きい。そこで、商品の正常価格について検討してみよう。

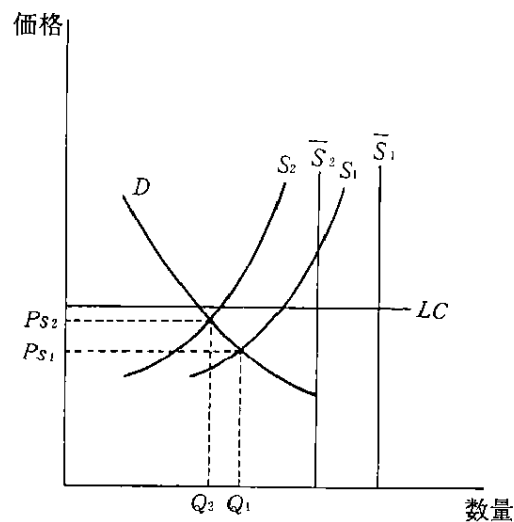
一次産品の生産部門は自由競争のもとに置かれるとしよう。その場合、価格が生産費（+正常利潤）を上回った場合には、生産者はその部門に参入し、生産費を下回った場合には、その部門から退出する。そのため、正常価格は生産費によって決定されるのである。さらに、過去のある期間、生産費が安定的であるような場合には、商人も正常価格を将来価格の予想の基準として用いているであろう。そのような場合には、生産費が将来価格の予想を支配することになる¹⁸⁾。

図2-1



その結果、この生産費と比べて、現在の価格が高い場合には、商人は市場への供給を増やし、生産者はこの部門の生産に参入しようとする。逆に、現在の価格が生産費よりも低い場合には、商人は市場への供給を減らし、生産者はこの部門から退出しようとするのである。そのため、生産費が安定的である場合には、価格調整のメカニズムが正常に機能するのである。この時、一次製品の長期的な生産は弾力的となる。

図2-2

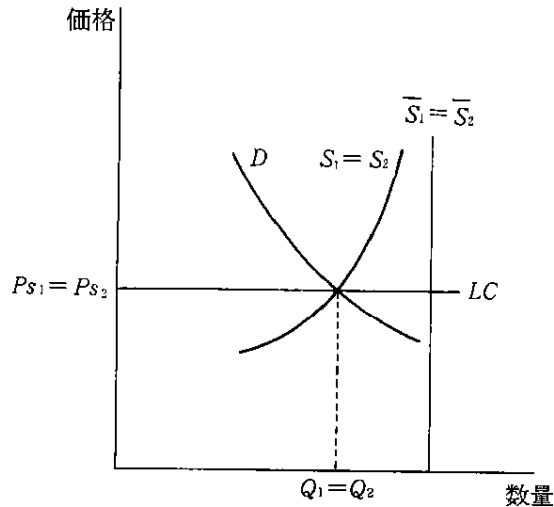


今、この長期の生産費を LC とする。さて、価格 p_s と長期費用曲線 LC との関係には、 $p_s > LC$, $p_s < LC$, $p_s = LC$ の3つの場合がある。図2-1, 図2-2, 図2-3は、この3つをそれぞれ図示したものである。なお、添え字の1, 2はそれぞれ1期と2期の数値であるということを示している。

図2-1の場合、1期において正常な水準以上の利潤が得られたため

- 18) 再生産可能な一次産品の場合には、長期の生産費が将来価格の予想に影響を与えている。しかし、再生産不可能な債券の場合には、こうした形で将来価格の予想を安定化させることが不可能になる。そのために、長期債券の価格は予想が不安定になり、投機が価格をいっそう不安定化させる可能性が高いことが、カルドアによって指摘されている。Kaldor, "Speculation and Economic Stability", p. 34-5.

図2-3



に、新たな生産者がこの部門に参入する。 \bar{S}_1 より \bar{S}_2 は大きくなるので、供給直線もまた S_1 から S_2 へとシフトし、販売量は Q_1 から Q_2 へと増大する。逆に、図 2—2 の場合、1 期において正常利潤が得られなかったため、生産者の中にはこの部門から退出する者もいるであろう。 \bar{S}_1 より \bar{S}_2 は小さくなるので、供給曲線も S_1 から S_2 にシフトし、販売量は Q_1 から Q_2

へと減少する。最後に、図 2—3 の場合は、1 期において正常利潤ちょうどを得ていたので、参入も退出も起こらない。 S_1 と S_2 は等しいので、供給曲線もシフトせず、販売量にも変化はない。すなわち、需要曲線と供給曲線の交点が同時に長期の生産費 LC と一致する場合には、定常状態となる。

カレッキは一次産品の短期の価格は需要によって決定されると考えている。その理由は、一次産品の供給が短期には非弾力的であるということである。そのため、一次産品の短期の価格決定は、商人の投機的な思惑によって影響を被ることになる。また、短期の価格決定に対し、生産費は影響しない。けれども、長期の価格水準に対しては、その生産物の生産費の影響が重要となる。つまり、長期においては、一次産品であれ、製造品であれ、価格は費用によって決定されるのである。カレッキの価格論 2 分法は短期的な経済調整メカニズムとして意味を持つのである。また、同時にこのことから商人による価格決定は短期的な状況のみに限定されることが分かるであろう¹⁹⁾。

19) この点で、以下のマーシャルの言葉は示唆に富むであろう。「われわれは、一般原則としては、とりあげる期間が短ければ、価値にたいする需要側の影響をそれだけ重視しなくてはならぬ」

さらに、生産費の安定性は将来に対する期待の安定性を作り出すので、商人の投機行動自体にも影響を及ぼしている。つまり、生産費が安定的な場合には、価格の上昇にともなって、短期の供給量が増加するのである。以上のように、予想に対する影響を考慮した場合には、生産費の問題は、長期のみならず、短期においても重要となるのである。

IV 正常価格と貨幣賃金

一次産品の価格は、短期的には、需要の変動の影響を受けて変動する。しかし、市場価格が生産費よりも上昇した場合には、生産者が参入し、生産が増大する。また、逆に、市場価格が生産費よりも低下した場合には、生産者が退出し、生産が減少する。そのため、長期では、生産費が価格を決定する。また、生産費が安定的な場合には、将来価格の予想も安定的になる。したがって、生産費が安定的な時は、商人の投機的な行動は、一次産品の価格を安定化させる効果を持つのである。

一次産品の正常価格は生産費により決定される。さらに、その生産費は次の4つの要因から成り立つ。それは、1) 貨幣賃金、2) その産業の技術水準によって決められる労働生産性、3) 原材料費、4) 1単位当たりの正常な利潤マージンである²⁰⁾。貨幣賃金と技術水準によって決められる労働生産性によって賃金費用が決定される。さらに、原材料あるいは利潤マージンの比率が与えられると、生産費が決定されるのである。そのため、正常価格が安定的であるためには、この4つの要因が安定的でなければならない。

いし、期間が長ければ、生産費の影響をそれだけおもく考えなくてはならない、と結論してさしつかえないようである。生産費の変動の影響は需要の変動のそれよりもその結果があらわれるのに長い期間がかかるからである。」A. Marshall, *Principles of Economics*, 9th (variorum) ed., Vol. I, Text, Macmillan, London, 1961, p. 349. 馬場啓之助訳『経済学原理Ⅲ』東洋経済新報社、1966年、37ページ。

20) 「歴史的には、全体としての産出物の価格水準の上昇は、(a) (生産性と比較される) 貨幣賃金の変化、(b) 利潤マージンの変化、あるいは(c) 収獲逓減のいずれかに起因する三つのインフレ的諸力のなんらかの組合わせが原因であった。」Davidson, *op. cit.*, p. 344. 邦訳、381ページ。

今、ある財 A の価格が供給の不足によって上昇したとする。財 A の費用自身には変化がない場合には、価格が費用と比べ上昇するので、他の財の生産よりも有利になり、財 A の生産が拡大するであろう。逆に、財 A の生産拡大は価格を引き下げる効果を持つので、財 A の価格は安定的であろう。

けれども、財 A の価格上昇にともなって、財 A が投入財として利用されている他の財の価格もまた上昇する可能性がある。また、このような形で経済全体に価格上昇の過程が普及していった場合には、財 A 自身の費用も引き上げられるであろう。こうした形で他の財の価格上昇、あるいは財 A 自身の費用の増大が生じると、財 A の価格上昇にもかかわらず、他の財に比べて、財 A の生産が必ずしも有利でないという状況が生じてくる可能性がある。この場合には、財 A の生産は拡大しない。さらに、そのことが財 A の価格を上昇させるであろう。つまり、ある財の価格上昇が経済全体に波及するような場合には、元の財自体の価格が不安定になる可能性が存在するのである。

また、このことは、価格調整メカニズムは、小さな価格変動に対しては、比較的、有効に作用するのに対して、大きな価格変動に対しては、あまり有効に作用しないことをも説明するであろう。各市場間の調整や価格改訂自身にも費用がかかる。そのため、ある市場で価格に変化が起きた場合でも、価格を変えることによって発生する利益が費用よりも小さいような市場には、このような価格変化の過程が伝達されないからである。そして、小さな価格変動の場合、利益が費用を上回らないために、他の市場の価格は全くあるいはほとんど変動しない。他方、大きな価格変動の場合、利益が費用を上回るので、他の市場の価格を変化させ、価格変動が経済全体に普及することになるのである。

それと同時に、各財の市場が密接に連動していて、ある市場の価格変化が即座に他の市場に伝わるというように市場構造が形成されている場合には、初めの価格変化は同じでも、他の市場への価格変化の波及が速く、変化の幅も大きくなる。この場合には、1つの市場での需給の調節を他の市場から独立して決めることが難しくなるので、価格調整のメカニズムが作用するのは、むしろ困

難になるであろう。そのために、かえって、各市場が適度に分断されていた方が、価格メカニズムの作用にとって有利なのである。

以上では、財相互の依存関係について考えてきた。けれども、同様のことは、正常価格と貨幣賃金の関係についてもいえる。むしろ、ポスト=ケインジアンにとっては、財相互の関連よりも物価と貨幣賃金の関係の方が重大である。そのために、ポスト=ケインジアンは物価安定のためには（労働生産性に対する）貨幣賃金の安定化が必要であると考え²¹⁾、所得政策を主張しているのである。

ある商品に起きた価格変動が小さな場合には、それによって起こる労働者の実質賃金の低下が少ないであろう。そのため、労働者は貨幣賃金の引き上げを要求しない。その場合、正常価格には変化がない。他方、価格変動が大きい場合には、労働者はそれによって起こる実質賃金の低下を防ごうとして貨幣賃金の上昇を要求するであろう。そして、その財が労働者にとって必要なものである程、いっそう強く貨幣賃金の引き上げを要求するであろう。労働は全ての財の生産に必要であるから、貨幣賃金の引き上げは、多かれ少なかれ、全ての財の価格を引き上げ、経済全体にインフレーションを引き起こすのである。この場合には、正常価格はもはや一定ではない。

また、貨幣賃金の動きが変化したことが、19世紀の資本主義ではむしろ一次産品の価格は長期的に低落傾向にあったのに対し、20世紀の資本主義では長期的に一次産品の価格が上昇しているという違いを生み出す原因となっている。19世紀の資本主義では、生産性の上昇が起きた場合、その部門の貨幣賃金は一定で、価格が下がっていた。すなわち、ある一次産品の生産性の上昇がみられた場合にはその一次産品の価格が下落していたのである。

それに対し、20世紀の資本主義では、生産性上昇が起きた場合、寡占的な市場構造のために、工業部門では価格が下がるのではなく、貨幣賃金が上昇する

21) 価格の「安定性」は、したがって、将来の正常な供給価格は過去の正常な供給価格と余り変わらないという一般的な信念に基づいているのである。そして、その一般的な信念とは、究極的には貨幣賃金の硬直性に対する信念である。」Kaldor, "Speculation and Economic Stability", p. 35.

ことによって経済調整が行われている。労働組合の動きはこうした過程に拍車をかけるであろう。それにしただって、一次産品の生産部門でも貨幣賃金が上昇する。こうして生じる賃金上昇の速度が一次産品の生産性の上昇速度よりも高い場合には、一次産品の価格が上昇するのである。以上のような動きがさらに、工業部門に反作用をもたらすならば、インフレーションは加速されるであろう。

以上のように、20世紀の寡占経済の発達には工業部門を主としていたが、それは一次産品の部門の価格決定にも影響を及ぼしているのである。

結 べ り に

この論文は、カレッツキ以来、発展を遂げている価格論2分法のうち、主として一次産品からなる「需要によって決定される」価格の決定メカニズムを問題にしてきた。ヒックス、カルドアによれば、この部門では、商人が価格を決定する。

一次産品には短期的な生産の弾力性がないために、一次産品の価格は大きく変動する。そのことは、さらに、投機を生み出す原因となるであろう。しかし、生産費が安定的な限り、長期の価格はこの部門においても、費用によって決定されることになる。しかも、生産費の安定性は、逆に、商人の将来価格の予想を安定的にするために、短期的な価格を決定する上でも重要な意味を持つのである。

したがって、一次産品の価格安定のためには生産費を安定させる必要がある。しかしながら、20世紀の資本主義では、工業部門の寡占化が進み、貨幣賃金も長期的に上昇している。このため、一次産品の正常価格もまた上昇傾向のもとにおかれているのである。